

「ほない歴史通信」

第40号
2006.9.1

地域の資源を活かした地域興し

「ほない歴史通信」が一九九六年十二月一日第一号の産声をあげてから、本号で四〇号を数えることになりました。ささやかな手作りの歴史通信ではありますが、これも皆様方のご協力とご支援の賜と深く感謝しております。

大子町には長い間息づいてきた生活文化が数多くあります。歴史の上に現れたもの、現れなかつたもの等が数多く散在しております。しかし、時代の推移とはいえ、人々の関心がなくなり、消え去つたものや今消え去ろうとしているもの等が处处に散在しております。そのような思いから、本会では身近な地域の生活にかかわってきた生活文化を記録し、保存していくために、先般「ほない歴史通信三〇号」の発行を一区切りに、『大子風土記』を発刊いたしました。「ちりも積もれば山となる」という格言がありますが、さらに、今後は消え去つたものへの掘り起こしや消え去ろうとしているものへの記録・保存に執筆者の輪を広めていきたいと思つております。

最近町内を散策してみると、自分の住む地域の文化財を地域住民の手で修復したり、町の後押しを受けながら周辺の環境を整備し、祖先が長い間育み、大切にしてきた身近な文化財などとの地域資源を活かしながら、地域興しをしていこうという地域が出てきています。

後冥賀地区では、灯火の会が中心となって、下冥賀地区の観音山の中腹にある「塩吹岩穴の観音様」と観音様への道が整備され、入り口には案内の標柱が建てられています。

上冥賀よりの長峰峠道の山中に、天保四年（一八三四）徳川齊昭公が巡村の折に名付けられた「相生の松（切り株）」とその脇に後世になって詠まれた歌碑「萬代もかけて行く末長峰のちぎりかわらぬ相生の松」があつたが、人目につく道沿いに移動し、その脇に「相生の松」記念碑が建立されました。この道は光圀公や齊昭公が八溝山へと足を運んだ名のある峠道なのです。

小生瀬地区では、龍の子の骨が納められていたと伝えられていた地福寺跡（齊昭公の寺社改革で天保年間に廢寺）の地蔵堂が、地域の人たちによって朱色の堂宇に改築され、また同境内にある樹齢五百年といわれるしだれ桜や境内周辺が整備され、案内板が生瀬地区文化体育振興会によつて設置されています。

南田気地区では、町観光課の援助により地区の入り口に観光案内板が設置され、上箕輪地区の樹齢六〇〇年といわれる「秀山桜（誉れ桜）」や十一面観音堂、光圀公命名といわれる「秀明水」石仏、「いぼ地藏」「王子神社」等が紹介されています。

老山桜樹は、明治の中頃樹齢五〇〇年を記念して、袋田村長から「誉れ桜」という称号を頂いたと伝えられています（菊池喜久雄氏談）。十一面観音堂は、延徳元年（一四八九）の創建（十一面観音と聖観音の両体を本尊）といわれ、安産と母乳がよく出る「子育て観音」として信仰されています。

大子町内には、身近な文化財や天然記念物などが各地に散在しています。それらが地域の人達によつて新たに再認識され、地域興しの一環として活用されてきています。

（小澤）

八溝菩堤谷今昔

鈴木 三郎

う盛夏の鐘、一山の終わりを告げる晩秋の鐘など…。
春夏秋冬おりおりの音色を漂わせたことだろう。知るものは昔変らぬ
清らかな流水のみである。

県道大子・那須線は大子を発し、下野宮地点で国道二・八号線と分かれ八溝街道となる。町付・上郷・上野宮集落を縦断した後、県境取上峠を越えて那須地に通じるが、上野宮字蛇穴集落を過ぎると人家は絶え、映ずるは壮大な杉の人工植林地、聞こえるものは八溝川のせせらぎのみとなる。この地点から栃木県境までの道路延長は約二糠、源流湧水地点まで約三糠。この溪間を往昔は菩提谷と呼び、界隈には上流から沈水渓金山沢、妙院沢、取上橋、取上峠、杉下橋、竜馬滝などがある。

奥地はすべて国有林で、往昔には話題が遣唐使費用に及ぶほどの産金事業、神仏混淆余話、近くは激動の昭和半世代にわたる八溝山林業開発など数々の歴史が秘められている。

○ 妙院沢

妙院地域は八溝山中県内最西部に位置し、一部は栃木県に境する。この沢は延長一・五糠、隣接する金山沢とともに八溝川源流である。この地域樹齢百数十年の天然広葉樹林だったが、昭和三十年当初、大子営林署の伐採事業所が設置されすべてを伐採し、針葉樹林に切替えたので、現在は見事な人工林として水源涵養の役目を果たしている。

菩提谷とか妙院とかホトケ臭のある名称だが、そもそも八溝山は古来神仏混淆の靈山であった。現在は八溝領神社・日輪寺が残る程度だが、中世には常陸と奥州の一大靈場として七堂伽藍が林立し、八方の尾根尾根には小院坊の構えがあつたとの事だから、その時代には、この地域の何處かには「妙院」なる院坊が所在したのだろう。「院」とは一区画をなし、周囲に垣を廻した建物のことと「仏僧」の居住するところを指すものよし、そのかみ、尾根尾根に斜する梵鐘は…。凛冽たる寒気をつんざいて走る嚴冬の鐘、幻想的な中春の鐘、涼を競

昔日の人溝八谷の一で栃木県境に水源を有し一糠ほど流れて妙院沢に合流する。沢べりはその名のとおり昔日は産金のメッカだった。八溝山は日本最古の産金地で、仁明天皇承和二年八溝黄金神の称を賜り、遣唐使費を潤すなど一二〇〇年も以前から「黄金花咲くみちのくの山」だつたのである。

産金事業が最も盛んだったのは佐竹支配時代で、同氏が秋田に移封された理由の一つに産金事業があつたともいわれる。確かに金を制するものは天下を制す。徳川幕府の佐渡金山しかり、毛利、尼子両雄が争つた石見銀山は、最後に支配した毛利氏がやがて中国を支配した事実もある。

砂金採掘は八溝山全域にまたがる事業だったが、特に上野宮奥地は山頂、山腹の中心施設に近かつた故もあって人の出入りが多く、最盛期には千人にも達するほどの人数が頓集したとのこと、こうなると精氣發揮の場が欠かせないため、女臭の漂う中之坊などはさながら遊郭化し、時の人も尼僧を含めた不逞の輩を処分したとの伝承もある。「嬰兒池」とか「真名板七塚」など今に残る話題は、このことに起因するのかもしれない。しかし、本命は金山沢にあつたとか、現在も金山沢ベリには「女郎屋敷」の地名が残っている。

○ 取上橋と取上峠

金山・妙院、兩沢が合流し、更に水を集め勢力を増し八溝川本流と位置づけられる地点に取上橋がある。大子・那須線のうち八溝川最上流の橋で、以前は板橋であつたが昭和四六年コンクリート橋に改良され深山の景観に一役買つている。橋を渡ると県道は大きくカーブし、いくつ



取上橋

アピングカーブを上り切ると峠に出る。取上峠である。この峠は県境のみまくり山であり、野州側の眺望が素晴らしい。見事な針葉樹造林地の彼方に那須連山が一望され、常州側の低屋根が細く縦走する流れとは極めて対照的である。

常州・野州の人たちは古い時代からこの峠を行き来し交流したようだ。当地上野宮北部への文化の流入度は、本命たるべき大子方面からの常陸文化、八溝山を越えてくる奥州文化、そのいずれより物産流通を介しての野州文化の影響が大きかつたようだ。今でも黒羽町奥地集落との交流があり、八溝カラオケ会のエース某奥さんなども野州出身のよしである。

○ シルクロード八溝版

上野宮奥地での生産物は、明治半ばまでは栃木県伊王野経由で東北本線西那須野駅又は大田原駅に運搬されたという。運搬方法は山道のこととて牛か馬の背を煩わせたことだろう。産物は、こんにゃく、ごぼう、茶、大・小豆の類、林産物（仙挽きの銘木とか木炭等）などと思われるが、それにしても伊王野までは相当の距離である。まず峠を



那須連山遠望

アピングカーブを下つて南方集落の奥地に至り、再び八溝山系の西尾根を上り、下りして伊王野の宿へとの経路を辿つたとしたら正に「現代シルクロード」である。あるいは地元生産者の運搬は峠までで、それから先は仲買業者が専門の運び屋を雇つておき、その日は先に峠まで出向き、失礼なカングリだが、生産者の汗の結晶名品を取上峠の名のどことく、お取上げ同様の値段で取引したのであるまい。（筆禍多謝）

○ 杉下橋と竜馬の滝

更に五百メートルほど下ると新田集落に出る。新田と称しても水田は一枚もないが、集落の中ごろに「竜馬の滝伝説」がある。落差三メートルそこそくだが、巨岩に囲まれた滝壺は常に青藍の漂いがあつて神秘に満ち「やまめの精」の棲を想わせる。ところが、この滝から川の精ならぬ駿馬が生まれ出て、やがて源平合戦には活躍した那須与一宗高の乗馬となり屋島の戦いに参加したとの伝承がある。往昔はこのあたりも那須野の国だったのかもしれない。因に「竜馬の滝」は八溝名勝五滝の一に挙げられている。

上野宮地区のテントヤマ（一）

飯村尋道

【本宮・戸部・桜井・門ノ井・花ノ草・吉ノ目のテントヤマ】
上野宮地区では、昔から祭事や寄合などは「上・中・下」の三講中に分かれてやってきた。上記の各集落は「中組」とよばれる。

さて、上野宮の中組のテントヤマについて、地元、花ノ草の鈴木善一さん（九十八歳）に聞いてみた。

鈴木善一さんによれば、「テントヤマは桜井にある。今はスギ山になってしまったが、昔は眺めがよくてウチの方までよくメイた。旧の四月一日に中組の講中でオニシメ持つて山を行つて、ヤドの人がサシヒレエで五十円集めて、オゴフとオミギを用意して、天念仏あげてヨツバラッテ楽しくやつた。アキンドが出てシンコ饅頭など作つて売つた。子供らも行つて楽しく一日を過ごした。小さい頃、じいさまのあとクツツイテ行つてテントヤマさ行つたのが楽しく思い出す。コワメシをオゴフにたいて持つて行つた。オゴフは手のひらにもらつた。テントヤマは、坂があつて登つて行くのがヨオイジやなかつた。デガいスギの木があつて、石をテントヤマとして祀つておいた。小さい鉢をたたいて拌んだ。喰い物などねえ時代で、テントヤマを楽しく過ごした。今は、部落の人々がテザカナ持参で集会所でやつている。」そうです。

早速、桜井にあるテントヤマを訪ねることにした。

桜井橋を渡り八溝川を越え、集落の中を抜け桜井林道を山上と上る。舗装の切れた所に車を停め、墓地の前を通りヤマに登ると、スギ林の中にひときわ太い一本のスギの御神木が現れる。御神木の前は結構なヒロッパになっているが、倒木や藪に

おおわれていて荒れ放題。視界もきかず眼下に門ノ井・花ノ草の集落も見えず、かつてのテントヤマの開放的な面影はない。スギの御神木の根元に比較的新しい石の祠が鎮座してある。祠は、高さ六〇センチ程の流れ造りの小祠で御影石。この小祠の傍らに高さ三〇センチ程の扁平な無銘の真石が立つてある。この真石こそが、鈴木善一さんの話していた「テントヤマとして祀つた石」なのだろう。

また、御影石の祠について、桜井の鈴木勝一さんによれば、「ライサマがスギの木さオツコッて、木のお宮が燃えたので、門ノ井の鈴木一成さんが寄付をした。信仰の至りでアゲたのだろう」と云う。このことから、上野宮中組のテントヤマは、初めは鈴木善一さんの話していたあの小さい扁平な真石、それが落雷で焼失した木造のお宮となり、そして今の石のお宮となつたようだ。

石のお宮を寄進した門ノ井の鈴木一成さんは、「昔からこの部落では、お天道サマの有り難さに感謝して天念仮講をやつていた。何も形がなくなつては、ノチの人にも分からなくなつてしまつので、木のお宮よりも石なら末代まで残り、部落の人らが何事もなく暮らせるのかなと思つてアゲた。昭和五十五・六年の頃だと思う」と話していた。

上野宮中組講中の六十五戸全部が、テザカナ持参でヤマに登楽しく過ごしたテントヤマでのオミキアゲも、蛇穴や磯神のテントヤマと同じく、遠い昔の語り草になつてしまつた。

樺太の終戦・抑留・引揚げ

佐藤武義

当時、私は二十九歳、樺太公立深草国民学校訓導（教諭）、

深草青年学校指導員、

さらに、帝國在郷軍人

会内渉分会常任理事のた

め合宿訓練、補充兵教

育、查閲、応召等の事務

處理に忙殺され、一方自

給自足の耕作等のため起

床四時、就床十二時の四

時間睡眠で、若い血潮を

戦時態勢に全力を傾倒し

ていた。

昭和二十年八月九日、

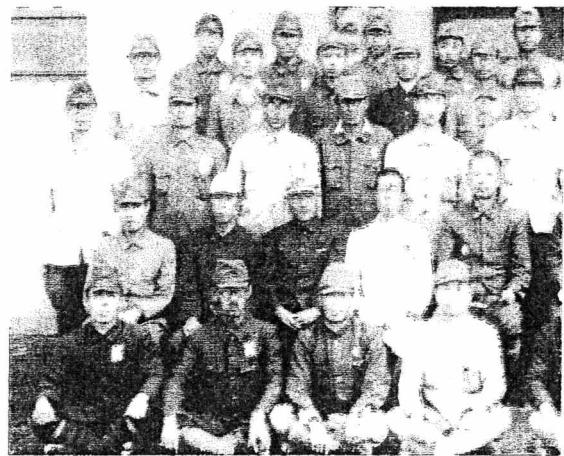
突如、ソソ中立条約を破棄したソ連兵が樺太に侵入し、開戦となる。

八月十五日、終戦。この日から樺太在住の人々の苦難始まる。

まず、緊急引き揚げのため駅前に集結していった婦女子が、ソ連軍の爆撃により、多数の死傷者を出し、引き揚げ中止となる。

八月二十日午前六時半、真国にソ連艦船十数隻の艦砲射撃、市内は焦土におおわれ、猛火の郵便局内で乙女九人の電話交換手が「皆さん！これが最後です。さようなら、さようなら」と、最後まで任務を果たし自決した。「九人の乙女」の慰靈は、靖国神社に合祀されている。また、慰靈「九人の乙女」の碑が稚内高台の公園に建立されている。

八月二十一日、私たちの内渉に、ソ連機八機が帝國燃料工業



（前列左端が筆者）
青年学校教員講習会（立派な年齢）

所（良質な石炭を液化し、船舶用の油を製造する）を爆撃、続いて落合町を襲撃三〇〇戸以上が炎上、死者多数を出す。

八月二十二日 知取りで「停戦協定」妥結。

同日午後豊原市爆撃の背信行為、市街の三分の一が焼失する。八月二十三日、ソ連極東指令長官アリモフがソ連軍隊の示威行進。豊原の樺太庁舎に乗り込み、事実上の終戦となる。

すでに、樺太の軍隊は武装解除、シベリアへソ連復興の労働として連行され、行政官、司令官、警察官は捕虜としてシベリアへ、酷寒冰雪の中、伐採作業に酷使される。樺太はソ連軍政下となり、本土との通信、交通は途絶え、ラジオは没収、新聞社は占領され、報道は皆無、音信は不通、通貨はルーブル、商店は閉鎖、闇市、物交、全くの孤島となりデマ、憶測、あてのない帰国を望みに托しての残留の身となる。

私たち内渉へソ連軍進駐、日本軍の物資庫を占拠。守備の当夜、ソ連軍十名が焚火に目を爛々と輝かし、六十連発の自動小銃を腰に構え、我々日本人十名は無腰で対峙、言葉の通じない一夜の守備は長かった。任務を万全に遂行できることへの安堵、就寝中の深夜、住居周囲で機関銃掃射がある。翌朝無数の空薬莢散乱を見て命拾いを感じる。青年学生を庇い、眉間に拳銃を突きつけられる。道に迷い、スペイ嫌疑で身分証明書を取り上げられ、二時間の拘置等に泰然として対応。「残留者全員元の職に復帰せよ」との命令で待望の開校。学校を守り、児童を護り、師弟一体の教育を開拓、日常生活が片言の日本語と片言のロシア語で交流、ほのかな宥和のきざしが見られるようになつた頃？宝の島をあとにした。

五月九日、真岡港出航、海中から引き上げた船に荒蕪、毛布一枚を持ち込み、乾パンを嚼り、函館港に上陸したのは、時に昭和二十二年五月十六日であった。元小学校長、那珂市在住）

山 橋 (二)

大森政夫

一 橋と山路

上小川地域の中で大沢、柄原地区は、大沢川を挟んで山が迫り森林に恵まれた土地柄である。大沢川に流れ込む大小の支流は多く、ツメタ沢、塩沢、森の沢、大塚沢など一〇指にあまり、それぞれ沢に沿つて山路が通じている。山路も様々で車が出入り出来る幅員の林道もあるが、おおかた途中まで奥に入るにしたがい人が歩けるだけの細い路になり、しまいにはけものみちとなつて消えてしまうことが少なくない。関東大震災や戦後の住宅難の時は木材の需要が高まり、当地方の山林も伐採が強化された。各沢入口の比較的搬出が容易な場所から次第に山奥へと伐採されていった。しかし林道を整備してトラックを入れるまでには至らず、山奥からの木材搬出は専ら櫛による。櫛で途中の一時的な貯木場まで搬出した木材は、荷馬車やトラックがこれを継いで製材工場へという段階的な運送方式が採られた。大沢、柄原地区的殆どの沢で仲間と木材の伐採から櫛による搬出までを手がけた、頃藤の鈴木幸一さん（七〇歳）に当時の櫛曳きの様子を伺う事が出来た。

二 櫛を使う山の条件

伐採した木材は枝を切り払い、丸太にした幹だけを山の斜面を麓までこかす（滑り落とす）。適当な量になると仲間と分け合つて櫛に積む。櫛は険しい急勾配の山路を縫つて目的地まで搬出してくる。山の状態によつては危険もあり、かなりの重労働もあるが、当時車の入らない山奥からの木材搬

出には唯一の道具であり大活躍したものである。櫛は人力で曳くが、構造は簡単で櫛を担いで山に入り、曳き手一人で驚く程大量の木材を一度に搬出する事が出来た。

三 櫛の構造

櫛の本体はきわめて簡単に出来ている。永い二枚の檻板と短い四枚の檻板を組み合わせた梯子型にしたものである。長い方は、長さ一〇尺五寸、巾四寸、厚さ一寸で、この板を並列させ、等間隔に四ヶ所ホゾを掘る。ホゾにさし込む横板の長さは一尺二寸、巾四寸である。したがつて長さ一〇尺五寸、巾一尺二寸の櫛の本体が出来る。（櫛の構造図2）

(一) カンザシの取り付け

櫛の本体中央部に設置してある横板二枚にそれぞれカンザシと呼ばれる杉板、長さ三尺五寸、巾四寸の補助板を鉄線で結びつける。これは櫛に木材を多く積載するためであり、同時に木材を櫛にしつかり固定する目的である。カンザシの両端にアゴと呼ばれる切り込みを入れ、木材を結びつけるロープを引っかけ易くするのである。（櫛の構造図4）

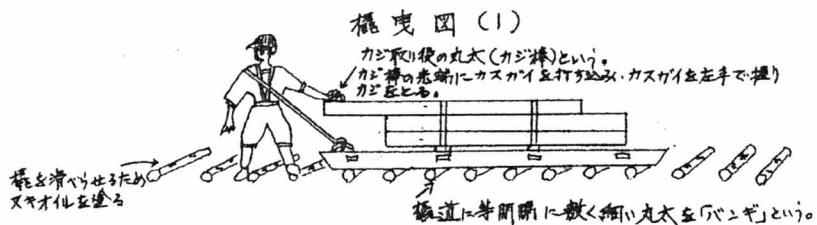
(二) レンジャク

そりを引くための引き綱をレンジャクという。堅い布製のベルト（動力を機械に伝える為に使われる）を適當な長さに切りその先端に櫛と接続する特殊な金具を付ける。一方櫛の前部の横板にはワイヤーロープを輪にして取り付ける。但しこのワイヤーロープの輪は横板に固定するのではなく、左右に移動できるよう余裕を持たせてある。ワイヤーロープの輪にレンジャクの金具を取り付ける。この方法は人によつて異なる事がある。（レンジャクの図・櫛の構造図3）

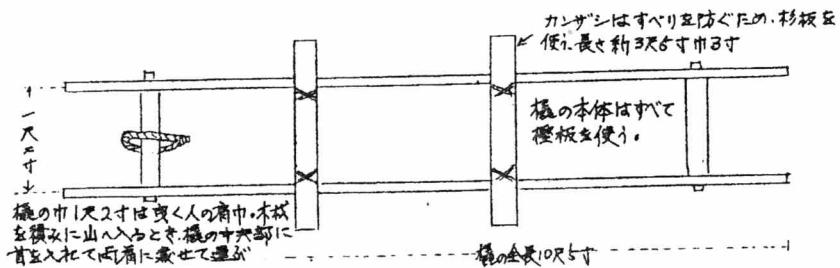
(三) カジ棒

櫛にはブレーキはない。木材を満載して山を下るが、危険な坂道を重い櫛をどのようにして曳くのかについて述べる。櫛には制御役とも言うべきカジを取るために櫛棒が必要である。

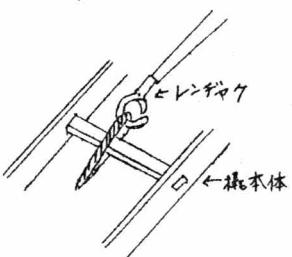
櫛(そり)の構造



櫛の本体図(2)

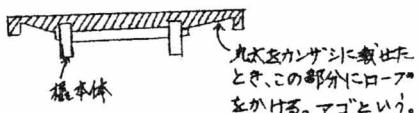


櫛とレンチャクの取付図(3)



櫛に付けるワイヤーの輪は左右に移動できるようにしておく。またレンチャクは危険のとき櫛からはずしやすいようにしておく。

櫛とカンザシの断面図(4)



櫛を曳く
レンチャク



ある。カジ棒は特別な装置ではなく、積載した木材の中から一本を選び（櫛を引く人の胸の高さの木材）、引き手の届く位置まで引き出しておく。カジとなる木材の先端には握りやすいように大型のカスガイを打ち込んでおく。
(櫛の構造図1)

第四五回全国高等学校森林・林業研究協議会

去る八月九日から十日まで、「余暇活用センター やみぞ」で、森林・林業に関連学科を設置する高校、二十一校の教職員が集い、「特色ある森林・林業教育の振興を目指して」研究会・情報交換を行いました。

開会式で、野内会長は「森林・林業教育の重要性や必要性が叫ばれていますが、現実には、生徒数減少や林業、業界の長引く低迷の影響により、森林・林業に関する学科は定員割れを起しこし、統廃合や総合学科への改編が進んでおります。多くの問題が山積しているときに、専門的立場と広い視野から研究協議や情報交換が出来ることは、私たちに勇気を与えてくれます。」と訴えました。

来賓の飯村大子町長は、「大子町三二五平方キロメートルの八〇パーセントが山地で、森林・林業の町です。大子清流高校は、県でただ一つの森林科学科のある高校です。卒業生は、林野庁、公務員とさまざまな分野で活躍しています。木材の価格の低迷で、林業離れが進み、林業が荒廃しつつあります。森林環境、国土保全、水源涵養など、我々は守つて行かなければなりません。先祖から受けた財産を守り育て、次の世代にバトンタッチする。林業が成り立たなくなつてしまつたので、国民が森林を守る。県では、『森林環境税』創設の動きがある。この貴重な資産を守つていかなければならない。」と挨拶しました。茨城県緑化推進機構の田村理事長は「子供たちの心の荒廃は何が原因か。日本人は農耕民族として二〇〇〇年の歴史がある。現日本人は、森林と共に生きてきた。記紀(古事記・日本書紀)の世界で五〇種類の樹種が出てくる。森林を恐れ敬い、利用してきた。昭和四〇年代の化石燃料革命、IT革命、バー・チャル

な世界に投げ込まれた。ニート、精神面でのバランスを崩した。森林と一緒に育てる。森林・林業の正しい教え方、自然の中で位置づける。学校植林の日、緑育の提唱。衣食住も森の恵みの中にある。学校林を利用して、後継者を育てていけば、日本の心豊かな感性、安定した情緒を取り戻せるのではないか。」と話されました。自然に接するということは、人間性を回復する最も有効な手段ではないでしょうか。

研究発表は、秋田県・鷹巣農林高校の佐藤先生、埼玉県・秩父農工科学高校の金子先生、愛知県・猿投農林高校の平松先生、広島県・庄原実業高校の山重先生、佐賀県・伊万里農林高校の富永先生、鹿児島県・伊佐農林高校の門園先生です。

九日は、添野先生・安藤先生の講演、視察研修(茨城県林業技術センター・日本三公園の水戸偕楽園)がありました。

筑波大学の安藤先生は、「森や野原で暮らす原点を見直そう。森林や木を使う文化が大切だ。縄文のクリ。居住地の近くにクリを植えた。クリを食べ、クリで家をつくった。森林のマツ。農耕を支えたマツ。室町時代から水田が発達する。マツを燃料として、使い、マツで家をつくった。土壁、草葺き。マツは、曲げに強いので、床板、梁(はり)材として使い、二〇~三〇年で循環した。」

室町時代から現代は、スギ。スギの丸太、スギの板、竹と土を利用して庶民の家をつくつた。炭火で暖をとつて、お茶でもてなした。私は今、建築材料として、スギの板倉に取り組んでいる。また、「茨城県の県北の大子地方にも、古くは、森林文化の拠点があつた。ウルシや和紙(コウゾ)が残つてることからわかる」と、話されました。

二日間、頂いたさまざまな情報・元気で、これからも、生徒の夢のもてる林業教育を進めていきたいと思います。(野内)

【昭和初め頃の農家 三】 楠 (一) 楠蒸かし

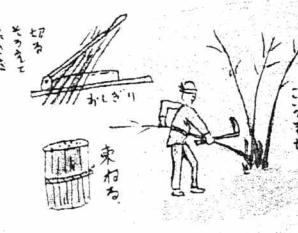
畑からの切り取りが終わると、楠蒸かしの準備をする。先ず楠を同じ長さに切りそろえる。大きな押し切りで数本を一緒に切り、直径四〇センチほどの束にする。

大子地方にはお茶、こんにゃくの外に特産物として楠があつた。楠はくわ科の植物で、その木の皮が強靭であるところから製紙の原料として利用されてきた。紙幣にも使われた。大子地方では楠の栽培が古くから行われていた。これはこんにゃく栽培とも関係がある。

こんにゃく栽培には毎年畑に植えるのが普通であるが、その外に自然薯畑と言つて南面した畑に大小のこんにゃくが一面に生えてくる。一年生もあれば、二、三年生もあり様々である。その中から大きいものを選んで掘り取る。小さいものはそのままにしておくと来年には芽を出し大きくなる。生産量は少ないが手間はかかりず、傾斜地の有効利用になる。この方法の欠点は、植えるのではないから土が浅い所だ。そこで春には麦わらや草などで地表を覆う。

日照りの害を防ぐためだ。畑の所々に楠を植えると、真夏の太陽を遮つて生育にはよい影響をもたらす。一石二鳥となる。同じ理由でお茶畑にも楠が植えられることもある。

楠蒸かしは冬の仕事だ。楠は昨年の切り株から四、五本の若枝が一年で二、三メートルくらいに伸びる。すらりとした枝で取り扱いは楽だ。これを楠鎌という刃の短い特殊な鎌で根元から切り取る。適当な束にして家まで運ぶ。



この蒸かし釜の上に竹のすのこを敷き、大きく束ねた楠の束を二、三段に重ね、その上に桶を被せる。また桶のまわりには藁で編んだ蛇腹のようなものを巻き、湯気が洩れるのを防ぐ様にする。準備が整うと竈に火を入れて蒸かし始める。頃合いを見計らって桶を取るとすごい勢いで湯気が上がる。屋根からもうもうと真っ白く出るので、近所の子供達も「あ、蒸けた。」と集まる。こうして大勢で「楠むき」が始まる。(石井)



歌声ひびく明るい町を目指して（五）

—大子混声合唱団の足跡—

本年六月、石島康雄さんが、篠底から新たに見つかったからと、大子混声合唱団に関する十七点の資料を「持参くださった。」いずれも活動の様子を示す貴重なものであることはもちろんだが、その中に第二回、第四回、第五回、第十回の「秋の音楽祭」のプログラムが混じっていた。本誌第三十八号、第三十九号で紹介した第三回、第七回、第八回と合わせると、七回分のプログラムが揃つたことになる。そこで本号では、これらのプログラムを検討することによつて、「秋の音楽祭」についてのこれまでの記述を修正もししくは補足をしておきたいと思う。

まず、恒例行事となつた「秋の音楽祭」がいつまで開かれたか、である。本誌第三十八号では「昭和四十年の第八回まで続いた」と述べたが、これは明らかな誤りである。資料で確認でききるように、四十二年開催の第十回までと修正しておきたい。なお、第二回プログラムでは「秋の音楽会」となつてゐる。

恒例化すると、開催日は毎年十一月三日か同月二十三日の祝日に合わせるようになるが、第二回目の場合は昭和三十四年十一月十四日（土）であつた。その当日、産経新聞茨城版のトツブには、「歌声でうまる大子町 きょう町ぐるみの音楽祭」と題し、六段抜きの記事が掲載された。同記事を読むと、次のようにいくつかの事実が判明する。一つは、前年に続き大子混声合唱団と大子音楽愛好会との共催と記されている点である。確かに第二回プログラムには共催者として大子音楽愛好会の名が明記されていて、合唱団の単独開催は第三回からであつた（大子音楽愛好会については本誌第三十六号を参照されたい）。二つ目

は、この第二回から大子町と大子町教育委員会の後援が得られたことである。以後十回まで、両者は後援者としてプログラムに名を連ねている。三点目は、合唱団の団歌についてである。同記事は、「昨年秋には会員の三村竜蔵作詞、川俣雄司作曲の団歌『うたいましょうごいっしょに』発表を記念して第一回大子町秋の音楽祭を盛大に催した」と述べている。「空につらなる山なみは／緑のリズム 声あわせ／歌えばこだまも呼びかける／大子のみなさん ごいっしょに／歌いましょうと呼びかける」。団員たちがいつも口ずさんだといわれるこの団歌は、第五回までは音楽祭の劈頭に披露されるのが常であった。プログラムを欠くので第六回は不明だが、第七回以降からは団歌の披露自分がプログラムから消えている点に注目しておきたい。

さて、各回の音楽祭で演じられた演目数を並べてみると、第二回二十六、第三回二十四、第四回十七、第五回二十一、第七回二十、第八回十九、第十回十七、と推移している。初期の頃に比べると、演目数の減少傾向は否めない。そのうえで、本誌第三十九号では出演者の顔ぶれに着目し、出演者の幅が広がる半面で肝心の大子混声合唱団の出番がなくなつてゐることを指摘した。今回、新たに見つかった四回分のプログラムの内容をみても、この点はより鮮明に現れている。

第二回から第五回までは、音楽祭の最後を飾つたのは主催者である大子混声合唱団であった。しかし、前述の団歌の扱いとも軌を一にするように第七回以降合唱団の姿は消えていく。第七回は大子電々コーラスが、第八回は大子一高ブラスバンドが最後を務め、第十回は全員合唱という形で締めくられた。

こうした音楽祭の動向から判断すると、昭和三十八年（第六回）から翌三十九年（第七回）頃が活動の大きな転機だつたといえるのではないか。

（斎藤）

代表田の瀧を描いた画家たち

吉成英文

茨城県を象徴する名勝地と言えば、筑波山と袋田の瀧がその代表であろう。県内各所に名勝地は多々あれど、取り分け霞ヶ浦湖畔から長望する紫峰筑波山、かたや水しぶきに濡れながら真直に見上げる袋田の瀧、山と川(瀧)、静と動、遠と近、まさに好対照である。

ここでは、奥久慈大字地方の自然や文化を取り扱う主旨からして、袋田の瀧を描いた画人たちを紹介しよう。そしてこれら描かれた作品の中には、瀧を真景図として描いたもの、或いは象徴的に捉えたもの、そして地図や絵図、記録図として残したものなど様々である。

なかには瀧そのものは描かず、瀧の上の山や、瀧と対岸の屏風岩等を描いたもの、そして湯宿の一室からの情景をスケッチ風に描いたものもある。

しかし何れの絵画も、これを描いた画人たちにとつてはそれぞれの心象風景であつたことにはちがいない。

今ここに掲げる一覧表は、私が現在までに実際の作品を現物または写真等で確認したものである。これを機会に今後にかけて、新たな袋田の瀧の出現を期待したい。

画家名	製作年代	備考（*＝個人蔵）
(二)立原杏所	文化年間	水戸藩士
(三)立原杏所	文化六年	"
(四)(伝)立原杏所	江戸末期	公命（所在不明）
(五)立原杏所	江戸末期	(三)の模写か？
		*
		(三)の模写か？

編集後記

「ほない歴史通信」は、平成八年十一月一日に第一号を発行して以来、年四回発行を続け、今回、四〇号を迎えることができました。記念号として編集人以外にも、鈴木三郎様をはじめ多くの方に「投稿いただきたい」とページとなりました。今日に至るまで多くの方々に支えられ継続できましたこと、厚く御礼申し上げます。

画家名	制作年代	備考
(三十二) 五百城 文哉	明治年代	油彩画(八号、額装)
(三十三) 石井 柏亭	昭和年代	水彩画(半切、軸装)
(三十四) 小堀 進	〃	水彩画(十号、額装)
(三十五) 横戸 庄衛	〃	版画(十号、額装)
(三十六) 稲村 退三	〃	油彩画(十号、額装)
(三十七) 森田 茂	平成年間	油彩画(十号、額装)

(追記)

右掲の画人たちのなかで特に注目したいのは、横山大観が率いていた日本美術院所属の画家の面々である。茨城新聞社主催の茨城美術展覽会(通称、茨展)の審査員を委嘱されていた大観は美術院所属の若手や新進氣鋭の画家を茨城の地に呼び寄せ岡倉天心ゆかりの五浦を見学させるなどしている。

それに加えてまだ当時、開通間もない水郡線に乗り込み、これまで開発間もない袋田温泉ホテルに湯浴みして袋田の滝の景観を堪能している。このなかには絵を描くことのみならず和歌や俳句を楽しんでいる放庵、南風、土牛、三良らの風雅が垣間みられる。

また同じ日本美術院所属の小川芋錢には、「早夏久慈川上流」と題する一幅がある。これは久野瀬の地獄橋よりチョット下流の川岸からみた上流の川岸に遊ぶ子供らと右岸の山々を描いたものである。これを推測するならば、芋錢による袋田の滝その周辺の探勝途上に描かれたものと思われる。とすれば芋錢の描くところの「袋田の滝」の出現の可能性も期待できよう。

八月十一日にはNHKスペシャル番組「満蒙開拓団はこうして送られた」が放送されました。当時の国策とはいえ、過酷な開墾のうえ、悲惨な結末で終了しました。過去の歴史を学び検証し、その結果を現代に、そして未来に役立てる」ことは大変重要であります。こうした観点から、これからも、地域の歴史情報を発信してまいりますので、よろしくお願ひします。

(鈴木徹)

（ 鈴木徹 ）

編集人 斎藤 典生(茨城大学人文学部)

野内 正美(茨城県立大子清流高校)

石井喜志夫(元 教員)

小澤 圓彦(元 教員)

鈴木 徹(大子町生涯学習課)

編集発行

遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室
久慈郡大子町大字池田二六六九番地

〒319-3551 02957(2) 26227